

「アジアのまち再生 社会遺産を力に」

鹿島出版会 2017年、310頁

山家 京子



まちには固有の状況が存在する。

本書の副題「社会遺産」は人がまちに身を置いた時に、すでにそのまちが有している状況、すなわち社会環境の意味で使用している。日本語では聞き慣れない言葉だが、英語ソーシャル・ヘリテッジ social heritage は人が生まれたときに置かれていた社会的境遇を意味する。それぞれのまちには社会遺産があり、まちの空間的特質として立ち現れる。社会遺産は状況であり、そこに身を置くだけで巻き込まれるような強い社会遺産もあれば、まちに真摯に向き合って初めて見えてくる微弱なものもある。

現在、世界のあちこちで「まち再生」が行われている。まち全体を再生する目的で部分を改変することもあれば、たまたま手を入れる必要が生じた部分の集積がまち全体を変えていく場合もある。いずれもゼロからまちを作り上げるのではなく、建造物など目に見える物理的環境の改変を通して、社会遺産を強化したり、よりよいものへと転換する作業である。

* * *

本書は、2013 から 15 年度にかけて実施した神奈川大学アジア研究センター共同研究「東アジア 4 国際都市の脆弱地区の調査、ならびに環境社会再生への方法の探求」の成果に基づいて、共同研究のメンバー、交流大学の研究者、さらに国内及びアジアの著者の協力を得てまとめたものである。

共同研究は 10 年を超える東アジアの大学との設計交流学生ワークショップを端緒としている。2005 年より神奈川大学建築学科は、東アジアの大学と建築学術交流セミナーを実施している。都市居住環境と建築デザイン教育をテーマとしたもので、最初は韓国・成均館大学校との 2 大学交流でスタートし、現在、韓国（成均館大学校）、台湾（台湾科技大学）、中国（哈爾浜工業大学、一時まで同済大学と武漢工業大学）と本学の 4 大学交流となっている。2007 年から、セミナーに学生設計交流ワークショップが組み込まれ、ワークショップでは開催校が所在する都市の脆弱街区を課題として取り上げてきた。

これまで対象とした課題敷地は、武漢の里份住宅地区の環境整備（武漢、2007）、世界遺産・華城を有する水原の文化景観と調和した住環境（水原、2008）、台北の文教地区にある日式住宅群のコンバージョン（台北、2009）、エッジを空間特性とする新山下町周辺的环境デザイン（横浜、2010）、歴史的都市の問題街区の再生（水原、2011）、台北の日本植民地時代に建てられたビール工場敷地のリノベーション（台北、2012）、哈爾浜の廃品回収業密集工場跡地の再生（哈爾浜、2013）、横浜のヤミ市を起源とする商店街の再生（横浜、2014）、台北の不法占拠地区を敷地とするキャンパスデザイン（台北、2016）、哈爾浜工業大学に隣接する歴史的街区のアーバンデザイン（哈爾浜、2017）である。

これら課題敷地の多くは、貧困エリアとして都市計画家や行政の関心から外されてきたものの、旧市街地の中心に位置し、まちの形成史と深くかかわってきた問題地区である。私たちは、ワークショップの対象地として、その地区の成り立ちを学び、フィールドワークし、さらに再生の空間的糸口を見つけ

ることでこれら問題地区に向かい合ってきた。

2013年秋、これらの研究交流及びワークショップ課題に関わる調査を素地として、神奈川大学アジア研究センター共同研究「東アジア4国際都市の脆弱地区の調査、ならびに環境社会再生への方法の探求」を立ち上げた。東アジア4国際都市とは現在、交流セミナーを実施している大学の所在地、横浜（日本）、台北（台湾）、水原（韓国）、ハ爾濱（中国）を指し、これらの都市は近代において似たようで異なる複雑な国際的背景をもち、その中でそれぞれ発展を遂げた点で共通している。また、各都市が抱える脆弱地区は、都市の整備発展過程から外れ、環境的社会的課題を有し、それぞれの都市が向かい合ってきた複雑な国際的背景を反映している。共同研究は、これら脆弱地区の課題・背景を調査し相互比較した上で、その再生戦略についても検討し、アジア的再生計画論を構築することを目的としている。

共同研究では、年に一度の交流ワークショップやまち再生に関わる各国の研究者との意見交換、研究者を招いての研究会に加えて、2回の海外調査を実施した。2014年2月に香港、2015年9月にインドネシアのジョグジャカルタである。香港では、湾子のショップハウスと九龍の石硤尾邨団地など再生事例、文化的観光地として再生した漁業水上集落・大澳を対象としたフィールドワークを実施した。ジョグジャカルタでは、ガジャ・マダ大学のイカプトラ教授、ジョグジャカルタ市立大学レトナ講師の協力を得て、歴史的保存地区及び都市内集落（カンポン）の実態調査及び震災復興の事例調査を実施した。

本書では、アジアの7つの国・地域、15の都市・地域に及ぶ20の事例を4部構成で示している。それぞれの事例は以下の通りである。

I. 歴史の読解とリデザイン

まちの歴史とその現れである地域空間はまさに社会遺産の代表的なものである。それをどのように読み取り、リデザインしていくのか。そこにアジア的課題と現代的解決の糸口がみえてくる。

1. スクラップアンドビルドを超えて：武漢新天地／武漢・中国（李百浩、松本康隆、李朝）
2. 日本寺院跡地に刻まれた物語のリデザイン：西本願寺広場／台北・台湾（王惠君）
3. 昭和レトロなまちなみの継承：六角橋商店街／横浜・日本（山家京子）
4. ハイブリッド都市における歴史街区の再生：中華バロック商店街／ハルビン・中国（余洋、王馨笛）
5. 負のイメージを転換するエリアマネジメント：黄金町／横浜・日本（上野正也）
6. 開港場租界における歴史的建造物群の現代的活用：旧中国人街・日本人街／仁川・韓国（尹仁石）

II. 点・線から面への広がり

まちの再生を、ひとつの、あるいは点在する建造物群の再生を手がかりとする事例を集めている。個々の建造物の再生の集積がまちの空気を変え、次代のまちの社会遺産となる。

7. 空き家再生とまちの資源の発信：三津浜にぎわい創出事業／松山・日本（岡部友彦）
8. 旧居留地のプールバールとモダンなまちなみ：日本大通／横浜・日本（内田青蔵）
9. ハイブリッドな近代建築が描き出す地域像：北城路近代リノベーション事業／大邱・韓国（鄭一止）
10. リノベーションによる若者のまちなか居住促進：シェアフラット馬場川／前橋・日本（石田敏明）
11. まちの基点としてのコア・ビルディング：防火帯建築群／横浜・日本（中井邦夫）
12. ダークツーリズムによる復興：津波被災地／アチェ・インドネシア（長谷川日明）

III. 脆弱街区の持続的再生

低所得者層居住区の再生事例を扱っている。再生のための大きなエンジンが必要で、エリアマネジメント、住民参加、アート、建築家支援など多くの力が合わさっている。

13. アーティストと住民の対話による不法占拠村の再生：トレジャーヒル・アーティスト・ビレッジ／台北・台湾（莊亦婷）
14. 生業と支援ネットワークが創出する効率的な暮らし：パヤタス廃棄物処分場居住区／ケソン・フィリピン（曾我部昌史）
15. 住民主導のアートによるまちづくり：甘川洞文化村と書洞／釜山・韓国（丸山美紀）
16. 国際建築家チームが参画する住宅改善：イェラワダ地区／ブネ・インド（吉岡寛之）

IV. 簡素な建築と豊かな文脈

共同調査研究で実施したインドネシア・ジョグジャカルタ周辺の海外調査に基づくものである。調査協力をお願いした現地の二人の先生に論考を寄稿いただくとともに、それらの論考を踏まえ、調査で得られたまち再生に関する知見を中井がまとめた。

17. 被災集落の復元力・オンサイト復興：プレンプタン／バンツール・インドネシア（重村力）
18. 伝統的住宅街区にみるレイヤーの重なり：コタクデ歴史的保存地区／コタクデ・インドネシア（イカプトラ）
19. 伝統的住宅の拡張・再構成による多世帯化：カウマン・カンポン／ジョグジャカルタ・インドネシア（レトナ・ヒダヤー）
20. 営みの持続を支える手法と実践：再生・復興事例／ジョグジャカルタ・インドネシア（中井邦夫）

最後に、これら事例を通す横櫛としてアジアのまちの再生の課題と再生方法について、重村が総説にまとめた。事例に挙げたまちを擁する都市を通史的に俯瞰し、歴史がコラージュされた東アジアの都市の風景と社会遺産の可能性を示したものである。

アジアのまち再生プロジェクトの事例検討により、アジアに共通するまちの社会遺産と、社会遺産をまち再生の力に変えるアジア的方法を検討した。

アジアのまちは本来、自然に寄り添い文化的にも豊かな文脈をもっており、それらは正の社会遺産といえる。一方、自然災害、戦争、人の営みがもたらした歪みによる負の社会遺産も抱えている。まち再生はこれらの空間的特質として立ち現れる社会遺産を解釈し、時に寄り添い、活用し、あるいは克服することに他ならない。

（やまが きょうこ 所員、 神奈川大学工学部教授）